

B型肝炎予防接種について(説明書)

1. B型肝炎とは

B型肝炎はB型肝炎ウイルス(HBV)によって起こる肝炎です。世界で約3億人が感染しているといわれ、日本でも約100万人が感染していると推測されます。乳児期にHBVに感染すると慢性肝炎になることが多く、長期にわたる治療を必要とし、最悪の場合、肝硬変や肝がんを発症します。現在日本では、乳児期の感染の最大の原因である母児感染を予防するために、ウイルスを保有している母親から出生した赤ちゃんに対し、ワクチン接種を行っています。しかしB型肝炎の感染は母親からのみではありません。父子感染や性行為感染などにより年間2万人の感染者がいることが分かってきました。さらに近年、外国由来のHBVも検出されるようになり、この外国由来株は成人期での感染でも慢性化する可能性があります。WHOは1992年にB型肝炎ワクチンを定期接種することを勧告しました。これを受けて多くの国ではB型肝炎ワクチンの定期接種、すなわち乳児すべてにワクチン接種を行っています。先進国で定期接種していないのは日本とイギリスだけです。

2. B型肝炎ワクチンについて

B型肝炎ワクチンは遺伝子組換え技術を応用してつくられたワクチンです。B型肝炎と肝臓がんを予防します。母親がウイルス保有者(キャリア)でなければ任意接種となります。出生後すぐに接種を開始することができますが、生後2カ月からヒブや肺炎球菌ワクチンと同時接種で開始するのが効率的です。お子さんの年齢にかかわらず重要なワクチンですので、接種することをおすすめします。初回接種の4週後に2回目の接種、2回目接種の20～24週後に3回目の接種を行います。

3. B型肝炎ワクチンの副反応

注射部位の発赤、腫脹、硬結、疼痛、熱感、掻痒感などがあります。その他、発熱、発疹、嘔気、下痢、食欲不振、頭痛、倦怠感、関節痛、筋肉痛などがみられることがあります。また非常にまれですが、アナフィラキシー反応や脳炎の発症が報告されています。

4. 次の方は接種を受けないでください。

- ① 明らかに発熱している方(通常は37.5℃を超える場合)
- ② 重い急性疾患にかかっている方
- ③ このワクチンの成分によってアナフィラキシーを起こしたことがある方
- ④ その他かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがいいと言われた方

5. 次の方は接種前に医師に相談してください。

- ① 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方
- ② 過去に予防接種で、接種後2日以内に発熱、全身性発疹などのアレルギーを疑う症状のみられた方
- ③ 過去にけいれん(ひきつけ)を起こしたことがある方
- ④ 過去に免疫状態の異常を指摘されたことのある方、もしくは近親者に先天性免疫不全症の者がいる方
- ⑤ 本ワクチンの成分に対してアレルギーを起こすおそれのある方